



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第72回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



悩みの風船がはじける前に



岩手県・盛岡市立城北小学校・六年

おりい じゅんき
折居 潤希

ぼくは、どこにでもいる普通の小学生だけれど、犯罪のニュースを見るたびに、決して他人事ではないと感じる。それは、事件を起こしたきっかけとなった出来事が、だれの身にも起こる可能性があると考えからだ。事件を起こすきっかけとなった出来事は人によって様々だが、特に、ぼくがどきっとするのが、友人関係に思い悩んで、少年犯罪に手をそめてしまった事例だ。

ぼくが夏休みに作った作品が、休み明け、学校に持って行った初日に、だれかの手によって壊された。三日間かけて作った大作だったので、とてもショックだった。展示されている物は触らないこと、触りたい場合は本人の許可を得ることになっていたのに、だれかがこっそり遊んでいるうちに、うっかり壊してしまったのだろう。わざとではないことを祈って、名乗り出してくれるのを待っていた。正直に言ってくれれば、責めるつもりは全くなかった。しかし、最後まで名乗り出る人はだれも居なかった。帰り際、一人の女子が、

「私だったら、そんなの一日で作れるし。」

とぼくに言った。言葉のナイフが、ぼくの胸に深くつきささった。

ぼくの社会は小さくて、他の人から見たらちっぽけな悩みかもしれない。だけど、そのちっぽけな悩みがどんどんふくらんでいって、何かの拍子に、風船のようにはじけてしまうかもしれない。犯罪に手をそめてしまった人だって、ある日突然、悪いことをしようと思ったわけではないはずだ。ずっと何らかの悩みを抱えていて、針の先が触れたことがきっかけとなり、風船がはじけてしまったのだと思う。そう考えると、やはり他人事とは思

えないのだ。

しかし、ありがたいことに、ぼくの周りには、ぼくの悩みの風船がはじけてしまう前に、空気を抜いてくれる人たちがたくさんいる。家族はもちろん、学校の友達や先生、近くに住む祖父母、地域の方々、習い事の先生など様々だ。中でも、特にするどいのがピアノの先生だ。ぼくの演奏を聴いただけで、

「今日、何かあった？」

と聞いてくるから、さすがだ。そして、気のすむまで、ゆっくりぼくの話聞いてくれる。聞いてもらうだけで、ぼくの悩みの風船はみるみるしぼんでいくから不思議だ。

反対に、ぼくが周りの人の変化に気が付くこともある。児童会長として、委員のみんなと一緒にあいさつ運動を行う中で、いつもと様子が違う人を見つけることがある。あいさつに元気がない、目を合わせないなど、気になるサインを出している。よく、

「明るいあいさつをしましょう。」

と言われることがあるが、本当に辛いときには、無理に明るくする必要はないと思う。それは、あいさつから発せられる「心のSOSサイン」を見逃してしまいかねないからだ。犯罪のない明るい社会に必要なことは、周囲が心のSOSサインを見逃さないこと、そして、一人で悩みを抱えず、だれかに相談することだ。だれかに助けを求めることは、決してはずかしいことではない。

日本は、「失敗が許されない社会」という印象がある。例えば、「不登校やひきこもりになったら人生の終わり」、「受験や就職に失敗したら絶望的」など、失敗をあまりにもネガティブにとらえる傾向がある。失敗をおそれるあまり、がんじがらめになっていると感じる。しかし、ひきこもりや不登校は、決して悪いことではないとぼくは思う。辛いときは、ひと休みしていいんだよ、と手をさしのべてくれる社会が、今の日本には必要だと強く感じる。

世の中は、理不尽なことだらけだ。生きていれば、いやな事がたくさんある。もしかしたら、良い事よりも、いやだと感じる事の方が多いかもしれない。「明るい社会」とはどういうものかと考えたとき、妹の勉強机の前にかざってある、「明日がたのしみになるカレンダー」が目にとまった。

とてもいいなと思った。今では、ぼくもそれを真似して、寝る前に明日の
楽しみな事を書きこんでいる。物事を前向きに考えることも、「明るい社
会」に欠かせないことだ。

ぼくは今後も、あいさつ運動を通して、仲間が発する心のSOSサイン
を見逃さないように心がけていこうと思う。そして、悩みの風船がはじけ
る前に、空気を抜いてあげられる存在になりたい。